

大学図書館問題研究会 第43回 全国大会(京都)
第8分科会 学習のハブとしての大学図書館

新しい授業基盤型学習支援の
構築へむけて
～ライティング・リーディング指導を基点に～

大阪大学附属図書館 赤井規晃

はじめに

- 「学習のハブとしての大学図書館」
- キーワード
 - 教室外学習環境の重要性
 - 教育の質保証という観点
 - 教員との連携
- 問題
 - Why : なぜ必要か
 - What : 何が必要か
 - How : いかに実現させるか

大阪大学での実践例

- 実施プログラム
 - 「レポートの書き方講座」
 - 「論文の書き方・文献の読み方 プチゼミナール」
- 動機
 - ライティングは学生にとって最も悩みどころ
 - 大阪大学では正課での授業がほとんどない
 - 情報リテラシーの延長としては適当
- 実施方法
 - 年1～2回、定員10名程度の自主企画
 - ラーニング・コモンズ
 - 教員、TA、図書館職員協働
- 内容紹介
 - 堀一成. 附属図書館ラーニング・コモンズを利用した教育実践の試み. 大阪大学大学教育実践センター紀要. 2010, (7), p. 81-84.
 - 上原恵美, 赤井規晃, 堀一成. ラーニング・コモンズ: そこで何をするのか, 何がやれるのか. 図書館界. 2011, 63(3), p. 254-259.
 - 赤井規晃. 大学図書館とライティング教育支援. カレントアウェアネス. 2011, (310), p. 2-4.

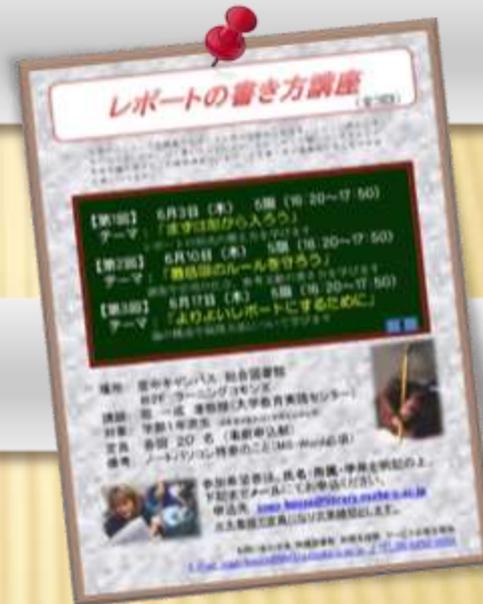
レポートの書き方講座

開催時期

- 6月3日～6月17日
- 全3回, (各回90分)

対象

- 1年生を対象
- のべ48名が参加



講師：堀一成准教授（大学教育実践センター）

目標：学部生共通教育科目のレポートレベル

講座の内容

第1回「まずは形から入ろう」

- 基本的な形式の整え方
- Wordを使い，仮レポートの作成実習

第2回「最低限のルールを守ろう」

- 情報倫理に基づく注意点
- 資料の調べ方（参考図書，インターネットの情報）
- 引用の仕方，参考文献の書き方

第3回「よりよいレポートにするために」

- 図書館利用法の提案に関するミニレポートの作成実習
- レポートを組み立てていく際の思考の整理法
- 論の構成や展開方法（パラグラフ，演繹と帰納）

各回の学習内容①「まずは形から入ろう」

「レポート」とは何か？

- 教員の悩み，レポートの形式になっていない
- レポートが課される目的を理解する
- 「～について述べよ」とはどういうことか
- 「作文」「感想文」との違い

形式の整え方を指導

- Microsoft Wordを使った実習
- 紙のサイズ，方向（縦か，横か）
- 止め方（ホッチキス，左とじ・右とじ）
- 余白，行数・文字数，行間
- フォントの種類・大きさ・色
- 表紙，タイトル
- ヘッダー，フッター，見出し
- 図表，キャプション

各回の学習内容② 「最低限のルールを守ろう」

コピペはだめ

- 情報倫理という考え方
- 著作権について

きちんと調べる

- ネットの情報の真偽性
- 一次情報と二次情報
- 図書館の活用

書き方のルール

- 引用の仕方
- 引用文献・参考文献をあげる
- 指定文字数を守る
- 「～だ． ～である．」調

各回の学習内容③「よりよいレポートにするために」

課題

- ・「図書館の新しい活用法について提案をまとめたレポートを作る」
- ・見出し含め600字以内，用紙はA4（縦），表紙をつける

何が求められているか

- ・「質問」→「答え」の組に直してみる
- ・「答え」に対し，「なぜ」，「何」と問いかけていく
- ・項目を整理し，ひとまとめの説明にする

わかりやすい文章にするには

- ・論理展開（序論・本論・結論），起承転結はダメ
- ・演繹か帰納で説明
- ・各段落に「小見出し」が付けられるか
- ・一文が長すぎないか

論文の書き方・読み方 プチ・ゼミナール

特色

- 論文企画書の作成＋講義＋最終発表（ゼミ形式）
- ライティングとリーディングを組み合わせた講義
- 論文をつくるプロセスを知る

進め方

- 3回の講義を通じて企画書をブラッシュアップ
- 最終回は他の参加者に「論文タイトル」と「キーワード」を当ててさせるグループワーク
- 添削指導ではない

講義分担

- ライティング担当：堀一成 准教授
- リーディング担当：私

講座の内容

事前準備

- 自分のアイデアを論文の企画書の形にまとめる

第1回「～書く～ 論文とは？」

- 論文の基本的な構成や組み立て方

第2回「～読む～ 書くための読み方」

- 論文を書くために文献を分析的・戦略的に読む方法

第3回「～書く～ 論文を組み立てる」

- パラグラフィティングの考え方や、論証の展開法

第4回「個人発表とまとめ」

事前準備 企画書の作成

テーマ

課題・意義

動機

- なぜその研究テーマをとりあげようと思うのか。

背景

- 既知の情報の整理, さまざまな見解の整理, 疑問点の抽出
- 客観的な状況を述べること

目的

- 何をどこまで解明したいのか, またそれにどういう意義があるのか

課題の解決方法

テーマに関する先行研究や理論・概念

- 先行研究や関連研究の整理, 理論や概念との関連を整理

分析の枠組み・方法

- どのような仮説, 予測を立てている
- どのような方法でそれを確かめるのか
- 予想される結果はどのようなものか

各回の学習内容① 「～書く～ 論文とは？」

「論文」とは何か

- 「レポート」「感想文」との違い
- 「問い」＋「主張」＋「論証」がある
- 「読み手」を想定し、わかりやすく、よみやすく書く

何について書くか（内容）

- 「問い」（トピック）の切り出しかた（5W1Hのツッコミ）
- 論文になるテーマとならないテーマがある
- 手元にある資料と「問い」の関係を整理

どのように組み立たてるか（形式）

- 執筆計画を立てる（分量、×切、自分に取り扱えるかどうか）
- 時間配分（調査と執筆）
- アウトライン（骨組み）をつくる

論文には「型」がある

- 「型」がある＝情報伝達の効率
- 「型」はお手本＝訓練で上達する

各回の学習内容② 「～読む～ 書くための読み方」

文字通り読む

- ①知らない言葉は辞書を使う / ②意味が分からないときは文脈を使う

道標を立てる

- ③キーワードを見つける / ④強調されている語，繰り返し登場する語を疑う

地図を書く

- ⑤キーワードは正確におさえる / ⑥キーワードを紙に書き出す

航海図にする

- ⑦問いから答えに至る道筋をキーワードで描く / ⑧本道と脇道を区別する

論文の構造をおさえる

- ⑨論文の基本形式は序論・本論・結論 / ⑩論文の基本構成単位はパラグラフ

要点をつかむ

- ⑪パラグラフのキーセンテンスをつかむ / ⑫キーセンテンスは，最初か最後

他人の手をかりる

- ⑬他人の力を借りる（カバーの紹介文，書評等） / ⑭文章理解のための案内図をつくることを目指す

事実と意見

- ⑮意見と事実を区別する / ⑯意見を述べているのかどうか，言語表現に気をつける

読みの方略（reading strategies）の初歩 16のルール

各回の学習内容③ 「～書く～ 論文を組み立てる」

パラグラフ・ライティング

- 1トピックにつき1パラグラフ
- トピックセンテンス

論証の展開法

- 演繹・帰納・アブダクション
- よい論証，わるい論証

文章法

- 文はなるべく短く
- はっきりと言い切る
- 主述は明確に
- 正確な語法，類語辞典・シソーラスの活用
- 比喩・造語・隠語・流行語は避ける

各回の学習内容④ 「個人発表とまとめ」

Aさん

- ・ 「『犠牲者』におけるソール・ベローのユダヤ意識」
- ・ キーワード：ユダヤ意識，家族の絆，共同体，受難

Bさん

- ・ 「進むグローバル化，投資もグローバルになるべきか？」
- ・ キーワード：グローバル化，外貨投資，新興国の成長，円高と円安，為替差

Cさん

- ・ 「TTのパターンとその役割-子ども，先生，学校文化に価値を付加する教室の形」
- ・ キーワード：TT，TA，子ども，先生，学校文化

なぜライティング教育か①

- 学校教育での問題点
 - 暗記重視、知識偏重
 - 考えるプロセスを軽視
 - 作文教育での「感じたままに」
 - 無着成恭の「生活綴り方」
- 大学までの学びの変化
 - 学校図書館の充実
 - しらべ学習、総合的学習の時間
 - 情報処理スキルの向上
 - 必修科目「情報」
 - 学習スタイルの変化
 - 集団、議論、発表

なぜライティング教育か②

- 情報リテラシー教育を超える
 - 情報取得はすべての基本
 - インプットが終局的な目的ではない
 - 問題解決行動を踏まえた実践を
 - 従来のフレームワークでは間に合わない
- 大学で求められていること
 - 物理的・仮想的リソースの統合的活用
 - 図書館メディアをどう使わせるか
 - 論理的な思考力
 - クリティカル・シンキング
 - 構造的な文章の書き方
 - 論理, 根拠, 事実と意見の峻別
 - プレゼンテーション能力

なぜライティング教育か③

- ライティング教育の3つのルーツ
 - 独立的科目
 - 富山大学「言語表現科目」、高知大学「日本語技法」、京都精華大学「日本語リテラシー」
 - スタディスキルズ
 - 『知へのステップ』、藤田哲也『大学基礎講座』
 - アカデミックジャパニーズ
 - 門倉正美、三宅和子、筒井洋一
- リーディング指導
 - 「読解力向上に関する指導資料」
 - PISA2003調査、他の能力に比して低い読解力
 - Academic reading
 - 非英語話者への英語読解のための協同学習法
 - Reading strategies
 - 「読みの方略」、論理的文章を構造的に読む

なぜライティング教育か④

- ライティング＋リーディング
 - 読み書きはリテラシーの基礎
 - 書き方のセオリーを読みの構造から知る
 - 協同学習の手法を援用
- 思考プロセスに即した指導
 - 入手／情報技術
 - pathfinder / bibliographic instruction
 - 思考／言語理解
 - reading strategies / critical thinking
 - 表現／言語表現
 - academic writing / (oral) presentation

学習・教育観の変化①

- 大学の大量化（マーチン・トロウ）
 - 18才人口の減少
 - 大学全入時代
 - 学習指導要領改訂
 - ゆとり教育
 - 知識レベルの低下
 - 学力低下論争
 - 寺脇研、苅谷剛彦、市川伸一、金子元久
- 社会の変化
 - グローバル化
 - 知識基盤社会
 - ユニバーサル化
 - その他
 - 「ポートフォリオ社会」「アカウントビリティ」（川島太津夫）

学習・教育観の変化②

- 求められる能力の変化

- ハイパーメリトクラシー社会（本田由紀）

メリトクラシー社会	ハイパーメリトクラシー社会
近代型能力	ポスト近代型能力
基礎学力	生きる力
標準性	多様性・新奇性
知識量、知的操作の速度	意欲、創造性
共通尺度で比較可能	個別性・個性
順応性	能動性
協調性、同質性	ネットワーク形成力・交渉力

竹内洋による書評、「教育社会学研究」79, p155から

学習・教育観の変化③

- 学習・教育観の変化
 - 「新学力観」（学習指導要領1989）
 - teaching から learningへ
 - ×知識伝達 ○知識活用力・創造性の涵養
 - learning outcomes（尺度）の重視
 - ×何を教えたか ○何を学んだか
- 政策の変化
 - 大学設置基準の大綱化 1991.6
 - 「一般教育」が解体
 - 「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—（答申）」1998.10.26
 - 学部教育再構築の必要性
 - 「我が国の高等教育の将来像（答申）」2005.1.28
 - 高等教育の質の保証
 - 「学士課程教育の構築に向けて（答申）」2008.12.24
 - 国際的通用性を備えた、質の高い教育

教育の質保証①

- 方針：どのような人材を輩出するか
 - Diploma Policy
 - Curriculum Policy
 - Admission Policy
- 答申を受けての施策
 - 双方向的授業設計
 - シラバス作成
 - 履修登録に上限設定（キャップ制度）
 - 成績評価の厳格化
 - 環境整備

教育の質保証②

- マネジメント
 - FDの義務化（教職員協働）
 - 教育偏重の日本型FD
 - スカラシップ（Boyer）理念に基づく職能開発
 - SDや学生FDへ幅広く展開
 - 外部における学習教育支援の要請
- 率直な感想
 - 実践事例の多くが学習意欲を喚起することに主眼
 - 教育は片手間という偏見
 - あくまで本格的な大学教育への導入部として有効であるにすぎない
 - 初年次教育・リメディアル教育、専門教育（講義、演習）、学際教育のピラミッド構造？
 - ユニバーサル化による「入口保障」の担保、出口保障は難しい

何が求められているか①

- 既存の制度・方法論のリビルド
 - 単位制度の実質化（98答申）
 - 教室外学習の質担保
- 新しい方法論の構築
 - アクティブ・ラーニング
 - 「主体的・能動的な学びを引き出す教授法」（08答申）
 - 答申での例示
 - 学生参加型授業
 - 協調・協同学習
 - 課題解決・探求学習
 - 現場での実践
 - 橋本メソッド
 - socratic / casebook method（ロースクール）
 - peer learning
 - problem/project based learning

何が求められているか②

- 教員
 - 正課、正課外における改善努力
- 学生
 - 授業への主体的な関与
 - スタディスキルの習得
- ただし、アクティブラーニングは万能薬ではない
 - 「授業外学習が授業のなかでの学習（以下、授業学習）と対をなす学習活動であり、そうした**授業・授業外学習がシステムとして、まさに「学習システム learning system」として有機的連関に機能し、そのことが学生の成長・発展につながる、一つの学生エンゲージメントの姿ではないかと考える**」（溝上慎一「授業・授業外学習による学習タイプと汎用的技能との習得の関連」）
 - 「**実践的課題を導入してそこで生き生きと学ぶことが、地道な基礎知識習得の学習に学生を動機づけるとは必ずしも限らない**」（溝上慎一「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」 p281）

図書館の貢献可能性①

- リソース
 - ハコ（空間演出）
 - 新規の施設（ラーニングコモンズ）
 - モノ（多様な図書館メディア）
 - メディアへの適切アクセス（ディスカバリサービス）
 - ヒト（人的サービス）
 - 既存サービスのリデザイン
- 方向性
 - 図書館員の求められる能力も変わる
 - ① 大学図書館職員としての専門性
 - ② 学習支援における専門性
 - ③ 教育への関与における専門性
 - ④ 研究支援における専門性
 - 「学習支援及び教育活動への直接の関与」
 - blended librarian/embedded librarianという理念

図書館の貢献可能性②

- 取組にむけて
 - 図書館の持てるリソース
 - 情報リテラシー教育の応用展開
 - 課題解決型学習の支援という観点
 - しかし「教員との協働」の具体的なイメージが欠落
 - 問題意識の醸成
 - 「支援プログラムがカリキュラムから遊離」（審議のまとめ）
 - 職員がなぜやらない（TAや教員に頼りすぎ）
- 普及させるには
 - カリキュラム、学習理論、教育理論に関心を寄せる
 - 図書館中心主義の脱却
 - 大学教育のコンテクストに「浸み込んでいく」
 - 「知のコンシェルジュ」という立場を自覚

知のコンシェルジュ

- ブレイクスルーのヒント
 - すべてはFDで解決しない
 - 授業改革は対応でしかない
 - カリキュラム改革が治療
 - 教育工学の知見が必要
 - 学習の方法論の多様さを知る
 - ディシプリン（学問知識体系）にも精通
 - 学問の学び方
- 大学の学習・教育をとりまく三位一体
 - 教師
 - ディシプリンの知識習得が効果的となる教育手法を試行錯誤
 - 教育工学者
 - 専門的見地から、教師のコンサルタントとして機能すべき
 - 図書館職員
 - 教師の努力（授業改善）と学生の努力（学習努力）をブリッジ
 - 場当たりの協働ではなく、ストーリー性が必要

正課学習の充実について①

- アクティブ・ラーニング（AL）
 - さまざまなトリック
 - コメント、質問
 - フィードバック
 - クリッカー
 - レスポンスアナライザ
 - 小テスト、レポート
 - ピアラーニング
 - リーディング教育（舘岡洋子、池田玲子）
 - 「相互教授法」（Palincsar）
 - PBL
 - マックマスター方式（医学教育では1970年代から）
 - チュートリアル

正課学習の充実について②

- 知識主義への反動としての経験主義
 - Deweyの経験主義学習に遡る
 - 『経験と教育』1938：教育とは経験の再構成（連続性＋相互作用の原理を持つ経験を望ましい方向に導くこと）
 - Kilpatrickのproject method（日本でも1920年代に流行）
 - 経験主義VS系統主義は常に繰り返される議論（戦後教育改革、勝田・梅田論争）
 - 社会的構成主義の学習観が浸透
 - 90年代以降、ICTの発達
 - 伝達より参加、トレーニングよりセラピー
 - ロシアでのВыготский再評価（=Бахтин再評価）
 - コミュニケーションを重視（⇔ピアジュの構成主義）
 - ホール・ランゲージもВыготский理論に依拠

正課外学習の充実について

- 問題の所在
 - 自学自習時間の質担保の方法
 - 単位制度を改善しても結局は学生の自由意思
 - 強制力のある授業デザインが必要
- 図書館サービスをどう合致させるか
 - 従来型利用者支援のリビルド
 - 汎用性の見直し
 - 授業・カリキュラムとのかかわり方（独自指導、関連指導、統合指導、無関係）
 - 科目指導が困難な理由⇔ディシプリンに関する基礎体力がない

提案①

- 問題の回帰
 - 正課と正課外をどうつなぐか
 - 教育支援と学習支援の統合という視点
 - 基礎はディシプリン
 - 「学際的な教育活動について、関連する学問の知識体系（ディシプリン）に関する基礎教育が必ずしも十分になされていない」
（「学士課程教育の構築に向けて（答申）」 16頁）
 - 教育のレベル・学習内容に合わせた選択
 - AIは学習への導入としては効果的
 - ディシプリン（知識体系）の獲得も重要
 - バランスのとれたデザイン

提案②

- 新しい授業基盤型学習支援の提案
 - 授業との関連を重視
 - 正課外だが一定の強制力あるプログラム
 - ライティング・リーディングを取り込む
 - 特にディシプリンを身につけることを重用視
 - インプットからアウトプットへ
 - 汎用的スキルを涵養する
 - 学習方法としては協同学習の側面をもつ
 - 図書館職員がディシプリンを深く知る訓練

リーディング・ライティングを正課外の学習支援とし、 授業と有機的に連携したデザインの例

	講義	アサインメント& ディスカッション セッション	リーディング& ライティング	セルフ ラーニング
学修時間	30	30	30	
	参加必須		参加任意	自主
担当	教員	TA	図書館職員+TA	学生

まとめ

